



恋愛小景



情交

「交換」

さつき

起

海に程近い河川敷の公園。夏場は涼味を求める人達で溢れるその場所は、冷たい潮風の吹き付ける2月の半ばではほとんど人気を集めることがない。空きの目立つベンチの一つに、男女が座っていた。

「ありがとね、来てくれて」

男のコートの左袖を弄びながら、女が切り出す。

「どうした。お前から連絡って珍しいな」

男は組んだ足に右肘をつき、右手の上に顎を載せていた。女はうつむき、小さな声で言う。

「私、あの人からふられたみたい」

男の体が瞬時に硬直した。

優に二分は経過した辺りで、男はゆっくりと背を伸ばし、組んだ足を解いた。右手をコートのポケットに乱暴に突っ込むと、女の方を見ないようにして聞く。

「……いつ？」

「…先週、かな」

「あいつ、なんだって？」

「他に好きな人、居るんだって」

女は両手で男の左袖を掴んだ。男は思わず女の方を見る。長い髪に隠れて女の顔は見えなかったが、男のコートを掴んでいる女の手にぽつぽつと二つ雫が落ちるのが目に入った。

「ごめん。一杯、応援して、貰ったのに、一杯、相談乗って、もらったのに、ほんとに、ごめん」

涙声で切れ切れに謝る女の両手に、男の右手が重ねられる。

「……いいよ、謝らなくても。お前のせいじゃないだろ」

「だけど、だけど、一杯、一杯、勇気、もらったのに」

鼻の通りが悪くなったのか、女の発音が不明瞭になる。

「あたし、なんにも、できなくて、こんな、こんな、こんな」

掴まれていた左袖を男が強引に引き抜く。女が不意のことに頭を上げると、男の腕が首に回される。頭を強く抱き締めながら、男は苦しそうに言い放った。

「謝るな」

「でも」

なおも言い募ろうとする女を遮るように、頭を抱えた腕に力を入れる。

「泣くのはいい。辛い思いしたんだからいい。でも、謝るな。お前が悪いんじゃないんだから。悪いのはあいつなんだから。だから、お前が、謝るな」呆けたような表情で男を見上げていた女の顔が、くしゃりと歪んだ。男の胸に顔を埋めると、大きな声を上げて子供のように泣き始める。男は目を伏せ、その頭をさらに抱き寄せた。

鼻を左手で押さえながら、女が男の胸から顔を上げた。鼻を押さえた手の薬指に、個性的なデザインの指輪が光っている。

「お前、それ」

男がその指輪を指した。

「ん？あの人を作ってくれた指輪」

「お前……」

「大事な、思い出だから」

男の右手が、その左手に添えられた。呆気なくするりと指輪が外され、男の掌の中に収まった。女の顔が見る間に真っ赤になる。

「ちょっと！何するの！」

「いいから」

「よくない！返して！」

男は自分の左手の上に女の左手を重ねると、元の通りに指輪をはめた。

その指輪に目を落とした女は、困惑した。

「え？ちょっと、これどういう…」

「これじゃ、ダメか？」

ほぼ同じデザインの指輪。違っているのは石の色だけだ。女が先ほどまで嵌めていた指輪の石の色は、淡い青。いま嵌めている指輪には、ほんのりとした桜色の石がはまっている。

「え、だって、私の、指輪、青、で、これ、ピンク」

男は左手に女の手を載せたまま、自分の右手を開く。そこには、青い石の指輪が乗っていた。

「やっぱりこっちじゃないと、ダメか？ピンクの指輪じゃ、ダメか？青じゃないといけないのか？」

男は先ほどと同じように、青い石の指輪をはめた。青と桜色の石が並んで女の指に光っている。

「や、あの、その、でも、同じ、あれ？」

「両方とも、俺が作った」

「ー！」

「あいつ、不器用な癖に指輪作るとか言ってて、結局俺に全部丸投げしてきて。石も、デザインも、全部俺が決めた。その時に一緒に作った。

……あいつが自分で作ったってお前に言ってたから、黙ってた」

「なっ」

男は両手を離し、うつむく。

「こんなタイミングで言うのは...卑怯だけど。今日は絶対に言うつもり
なかったけど、もう、無理。お前の泣き顔見たら我慢できなくなった」
自分の膝の上で両の拳を握りしめると、男は頭を仰け反らせ空を
仰いだ。

「俺は、お前にピンクの指輪、着けて欲しい」

女がその言葉の意味を解するのにさして時間はかからなかった。目を
丸くして男の顔と指輪を交互に見ている。更に男が続けた。

「今すぐでなくていい。お前の気持ちに区切りがついたら、どっちか
いらないと思った指輪を、俺に返してくれ」

顔は空を仰いだままの状態、ベンチから男が立ち上がる。

「今日は俺、帰る。お前のそんな顔見てたら、俺、あいつに喧嘩売りそ
うだから。送ってやれなくて、ごめん」

女の目に入るのは、真っ赤になった男の頬と耳。寒さから赤くなってい
るのか、上気して赤くなっているのかは判別がつかない。

「じゃ！」

顔を元に戻して真っ直ぐ前を見据えると、男は駆け出した。すぐにその
姿は遠くなっていった。

ピンポン.....。

「はい、どな...」

「私」

扉越しに声を掛けた男は、慌てて玄関を開ける。そこには女が立っていた。ミトンを着けた手には小さな紙袋を下げている。

「私、こっち、要らないから、返す」

両手で紙袋を男の胸に押し付ける。男はおずおずと受け取ると、中を改める。小さな紫色のリングケースが鎮座していた。男が顔を上げると、女は「じゃ」と言い残して走り去った。

「おい！ちょっとま...」

女の背中を見る間に遠くなり、階段を下りる音だけが聞こえてくる。走れば追いつけるかもしれないが、男は手元にあるリングケースに目を落とした。

扉を閉め、男は目を伏せる。先日の公園の一件から、三日しか経過していなかった。自分の心のままにしてしまった突然の告白。それを後悔して過ごした三日。

「はええよ...」

玄関の扉に背中を預けて、紙袋からリングケースを取り出した。手触りのいい紫色のリングケースが、男の大きな掌にちんまりと収まる。指先で蓋をなぞりながら、頭を扉に打ち付けた。ゴン...ゴン...ゴン...と、リズムカルに扉が音を立てる。

(確かに、俺言ったけど...。結論早すぎるだろ...絶対無理だろコレ...)

ゴン...ゴン...ゴン...と、頭を打ち付ける音が30回を越えようかとする頃に、男の胸ポケットで携帯電話が音を立てた。女からの着信だった。大慌てで出て、携帯電話を首に挟む。

「もしもし!？」

『見たの?』

男から何の連絡もないので、どうやら痺れを切らせたらしい。

「まだ...」

弱弱しい声で男が答えると、女ははっきりとした口調で言い切った。

『今見て』

「いや俺にだって心の準備ってもんが」

『いいから見て』

「だけど」

『いいから！』

今までにない女の強い口調に、反射的に蓋を開いてしまう。

「あ。...え？」

『それが私の答えだから。じゃ』

ぶつり、と切れた電話を呆然と見ている男の左手から、リングケースが転げ落ちた。リングケースを離れた指輪が三和土を転がっていく。動きを止めた指輪の石の色は、青かった。